

甲虫標本を集める楽しみ 故高橋寿郎氏遺稿集No. 7 兵庫昆虫同好会事務局

昆虫採集を始めてしばらくすると、国外の美しい虫、変わった虫に出会うことが大変楽しみになり、そういったものを手許に集めてみたいといった蒐集的な欲望が禁じ得なくなってくる。

本格的な蒐集家ではなく、まあ分相応の小遣いで購入できる範囲の標本を手許に集め、楽しむことが現在までも続いている。そこで、今までお世話になった標本商の方々とお付き合いの状況を思い出しながらここにまとめてみた。何分にも限られた範囲でのお付き合いであるから、まだまだここに出てくる以外にも多くの標本商の方がおられると思うが、大体の代表的と考えられる標本商とお付き合いはあったものと思う。読み物風にそれら標本商の方々との蒐集の楽しみを思い出の記としてまとめた次第である。

ちなみに私の蒐集は、コガネムシから始まり途中蝶をやっ、それから再びコガネムシ、クワガタムシを中心に集めたもので、そのような標本商とお付き合いといったことになるかと思われる。また、昆虫研究の先輩である故大倉正文氏の持論であった一匹何万円もするような高額標本にはあまり手を出さないと、みみっちいコレクターであったことをご承知置き頂きたい(なお、今回述べさせていただいているのは原則として1998年末までのことである)。

昆虫趣味の会神戸支部ができたのが1937年で、その支部報第1号の発行が1938年4月である。私も早速入会させて頂き、幹事をしていた米谷正司氏宅にお邪魔した。当時、米谷氏は標本商のようなことをやっておられ、標本在庫リストをガリ版で製作して標本の販売をしておられた。私も若干分けて頂いたが、「台湾産の標本がほしいのであればこの人達に連絡してみても」と、台湾埔里にいた余寛氏を紹介してもらい、早速手紙を出した。当時の日本のことであるからもちろん日本語で書いても手紙が届くし、余寛氏からも日本語で一匹二銭とか三銭と値をつけたコガネムシのリストが手書きで送られてきた。

老円を超えるような標本はほとんどなかった。私のような中学生の身分でも小遣いでやりくりすれば何とかなる価格であった。何回か購入したが、テナガコガネを無理して購入したことがある。缶の中にオガズを入れ、生きたままの♀のテナガコガネを入れて送ってくれた。動くテナガコガネを見て感激したものである。

平山博物館(東京)

戦前、東京井の頭公園池畔にある平山博物館で「虫同好会」を設立、機関誌「虫の世界」が発行されていた。この「虫の世界」誌上でモルフォチョウとか台湾産クワガタムシとかヴァイオリンムシなどを売っていた。私も台湾産のクワガタムシのセットを1組購入したことがある。普通種が主体であったが価格も安かった。モルフォチョウは当時の値段としては高く手が出なかった(一方は日本産の虫であり一方は輸入品であるから)。平山修次郎氏独特の筆態で産地ラベルをひとつひとつ書いて包んだ標本であった。標本はまずまずの状態であった。

大蔵生物研究所(東京)

戦後15年も経った頃、大蔵丈三郎氏による大蔵生物研究所が標本商として昆虫標本の販売を始めた。「新着標本案内」というのが毎月発行され始めた。当時私も甲虫ではなく蝶のアゲハチョウ科を中心にシロチョウ科、マダラチョウ科、モルフォチョウ科の標本を手の届く値段のものから集め始めた。月給取りであるからもちろん高いものは買わなかった。否、買えなかった。だが一応代表的なものは一通り揃えるべくかなり購入したものである。当時、大蔵生物研究所から発行された「昆虫標本在庫表」1965,1966,1969,1971,1973年版の5冊が今手許にあるが、なかなか立派な全頁アート紙の22p.ぐらいの写真が入った立派なものである。今から見ると標本の値段も特殊なものを除いては安く買うことができた時代であった。

大蔵生物研究所の標本はいずれも綺麗な標本でよかったが、大きな欠点というか不満な点があった。すなわち注文は前金制であった。したがって、金は送ったが標本が送られてくるまでにわりと長い間かかる。中には品切れで次の入荷まで標本が送られてこない。何の連絡もない。整理が忙しくて処理が遅くなるのかと思われるが、前金を払った側には大きな不安がある。いつ標本を送ってくれるのかと買い手の弱い取引であった。標本商も次々と現れてきたが、どれも注文した標本を送ってきてから検品後10日以内に送金するというように、買い手の立場を尊重してくれる販売方法であった。そんなことから、ある時期に購入することをやめてしまった。

大蔵丈三郎氏が亡くなってからご子息が引き継いで標本商をやっておられるようだが、方法は同じようであった(最近はどうなっているのか知らないが—)。もちろん、売り手の方にも言い分があろうと思うが、もう少し買い手を信用して販売してもらいたいものである(もっとも、標本を送らせて猫糞する買い手もあると聞いている。ある程度実績がつけば後払いでも…と考えるが、この種の取引は何時の世も問題が起こりやすいものであり、どちらの方法も一長一短があるようだ)。

なお、現在の取引で先金を取るといった方法でやっている標本商は知らない。まあ信用してもらっているのかもと考えたりしている。

玉貫光一氏もその時代、標本商のようなことを始められた(東京)。ここでは標本ニュースのようなものが発行されていなかったように思う。こちらの希望を連絡しておく、こんなものが入荷したと手紙に書いて連絡してくれる。注文品は使い古したアルミニウムの弁当箱などで送ってこられたりした。時には某博物館(海外の)の放出品と思われるがこんなカブトムシがあるが…と、当時購入しにくかったヘルクレスオオツノカブトなどを知らせてくれ、よければ取り寄せるといった販売方法であった。

一般的に高い値がつけられており、私などの手に負えない価格のものが多かった。いつの間にかこの付き合いは途切れてしまった。

HEXAPODA (東京)

1970年には小岩屋 敏氏が Hexapoda という蝶についての標本目録の発行を始めた。手許にはNo.3

(1972.Dec.)から1976年Oct.号(番号が打たれていないが数えると15号になる)までがある。その後、1990年代にも時々送ってこられるが、この15号までは全く蝶標本の販売だけであった。トリバネアゲハ、キシタアゲハの類とバルナシウスが多かった。小岩屋氏は蝶の造脂が深い方で、「中国蝶類研究」第1巻～第3巻(1989～1996)はよく知られた名著である。

最近送られてくる Hexapoda には話題の甲虫標本なども掲載されている。今ひとつ私のような貧乏コレクターには手が出せない感じがした。

水沼生物研究所(大阪)

新着標本案内No.11(1997.Mar.)が手許にある。年数からいって1975年頃から標本商を始められたのではないだろうか。不定期刊ではあるが現在(1998)でもこの新着案内を送ってくれている(無料)。

「俺は日本一の採集家だ」と豪語しているだけあって、水沼哲郎氏自身東南アジアの各地に採集に出掛けて珍品を探ってくる(その様子は新着案内上に発表されている)。ハワイに行つてハワイハネナシクワガタ、ムンロハワイハネナシクワガタを探つてきて売りに出した(1997)。新着標本案内は珍しい蝶・甲虫が出ており、標本は綺麗である。著書「世界のクワガタムシ大図鑑」の影響か、クワガタムシには力が入っている。水沼生物研究所からは「昆虫の世界1～3,1978～1980」、「INSECTA トップ」No.1,1987～No.7,1992が出版されている。

標本商は標本カタログと違って昆虫についての機関誌的性格の出版物でカラーページも入ったなかなか大変なものである(当時1冊こしらえるのに60万円の費用がかかったといった裏話を聞いたことがある)。とにかく自分もコレクターであり採集上手であり、虫についての知識の豊富な方であるが、今一つよくわからないところのある標本商である。上記のような出版物にしる新着標本案内にしる誤字とか当て字が多く、よくわからない表現方法のものが多。ある時、注文もしないのに標本が送られてきて開いてみるとかなり珍しいコガネムシ類がそこそこの金額分入っており、「最近入荷した標本だが支払の金に苦労しているのを買ってくれないか」とあった。「気に入らなければ返品してくれてもかまわない」ともあった。やせ我慢をして標本代を送金したが、注文しないものを送らぬようにと一言書いてお

いた次第。

水沼哲郎氏は当時大阪梅田阪急百貨店で横山光夫氏の息子さんのやっている標本や昆虫採集、整理器具などの店に標本を委託販売したりしていた。

この横山氏の阪急百貨店の店には、勤めの合間によく行ったものである(当時、私は大阪に勤めていた)。午前中に行くと横山氏が来ておられず、百貨店の女の子が店番をしている。ある時、金網籠に生きたクワガタムシが入っていて、一匹百円也と書いてあった。能勢当たりから採ってきたもののものであった。

よく見ると、オオクワガタが入っている。女の子にあれこれと言ってオオクワガタだけ5頭出してもらって500円払って買って帰った思い出がある。留守番の女の子に売らしたので、どのクワガタも一緒に見えるから仕方なかったのであるが、いささか心苦しい反面、儲けたと喜んで買い物をしたことがある。

水沼氏の即売会にも何回か行ったことがある。12時開場とあり、12時少し過ぎて行っても会場は雑然としていて準備ができておらず、標本箱が積んであるといったような時間にルーズな即売会が多かった。開場前には準備完了しているべきであろう。国鉄(現JR)芦屋駅前の百貨店での即売会には水沼氏が採集してきたヤンバルテナガコガネの生きた標本が展示されており、見せてもらって感激したものである。

水沼生物研究所も兵庫県南部地震の被害を受けられたとか。現在では立ち直って運営をされているようである。関西にある標本商の代表的な存在と思われる。これからも良い変わった標本を提供してもらいたいものである。

インセクトショップビートル(岩槻市)

古見義明氏がやっている標本商である。いつ頃からやっているのかよくわからない。私は標本案内No.70ぐらいからNo.179ぐらいまで送ってもらっている。

1980年ぐらいからやっているのではないかと思われる(標本案内は有料である)。

とにかく、自身中国に行ったりして現地の写真を掲載した標本案内を送ってきたりする。標本案内は写真を載せたゼロックス版であるが、なかなか一品料理的な珍しいもの、大きなもの、色彩変化等々甲虫のみならず蝶や蛾その他の昆虫も扱っている。ヨ

ーロッパで行われる昆虫標本の即売会のニュースが出ていてなかなか面白い。ただ大きさがまちまちな標本案内を送ってこられるのは整理するのに苦労する。標本はきれいである。私も度々注文したが、注文したらすぐ送ってくれるなど大変気持ちがいい。いわゆる「何でも屋」といった標本商であるが、やや特異というか標準以上のレベルの標本商である。

セツロー社(栃木県黒磯市)

橋本説朗氏主催の店である。1981年3月、東京の黒磯社をやめて大阪に来て標本商を始めた。店の場所が大正区南恩加島で、私が十数年勤めた会社のあったところのすぐそばで、大変懐かしくお付き合いを始めた。セツロー社の標本リストはNo.1から送ってもらっている。

その後、2年半後に淀川区宮原に移り(この店には何ったことがある)、11年半して栃木県の黒磯市に移り現在に至っている。もともと蝶屋と本人が言うように「セツロー社のリスト」(無料)は蝶が多く、甲虫(クワガタ、カブト、コガネムシ)が次いでいる。得意な地域は東南アジアであるが、アフリカの甲虫など結構扱っている。セツロー社のリストは独特の黄色い紙を使用したもので、毎号10ページ前後のものが年間6回ぐらい発行されている。

途中、数回カラーコピーの入った号を発行したことがある。標本はきれいである。また、注文すればすぐ送ってくる。リストでは橋本氏の巻頭言がなかなか面白い。また、クイズが時々あったりする(セツロー社のリストNo.119、1998年1月にのったクイズに応募して第2席に入賞、100mmのオオフタマタクワガタを商品に送ってもらった)。

標本ばかりでなく標本箱とか昆虫針、時には昆虫関係の文献も取り扱っている。

1995年の兵庫県南部地震にはわざわざ橋本氏自身が見舞い品を持って拙宅を訪れて下さって恐縮した。栃木県の黒磯に引っ越した理由はいろいろあると思われるが、都会生活に飽きたからといったことが大きく影響しているようである。

セツロー社のリストは1996年2月に100号で、1998年12月がNo.128である。このリストは第1号から現在保管している。やはり開店からお付き合いしている関係からどうしても注文することが多い。息の長いお付き合いであり、かなりの標本を分けてもらっ

ている。

佐藤誠一郎個人標本商(青森～東京)

佐藤誠一郎氏が個人で昆虫標本分譲案内というのを発行(はじめ青森市からの送付であったが、後に調布市に変わった)、1984年頃から始められたのではないかと思うが、はっきりしたことはわからない。分譲案内には番号などは打っていないのでどのようになっているのか。手許には85-4(1985年6月1日)～89-5(1989年12月7日)とある。

蝶主体の販売で、わりと高額なものが多かったように思われる。甲虫も大型のものは結構扱っていた。文献も扱ったりして、後に佐藤誠一郎氏は昆虫書籍商パウアーアンドサトウジャパンとして、昆虫標本の取扱いはやめられた。

標本はあまりよい状態のものではなかったようであるが、南米の蝶、甲虫は多く取り扱われたようである。

カプト(東京)

永井信二、藤田和久氏で始められた標本商である。標本案内「カプト」はNo.1からあるが、発行年月日がついていない。No.4に1989年1月31日の日付が入っているの、おそらく1987年頃に第1号が出たのではないだろうか。標本案内は、はじめ「カプト」であったが、第3号から「カプトスペシャル」になった。表題のごとく甲虫が主体である。蝶などはほとんど出ない。文献の取扱いは時にある。このカタログ(標本案内)「カプトスペシャル」もNo.48に「従来無料を原則として発行してまいりましたが、50号より1年間に1度でもご用命下さいました方々を除いてリスト代金を年間5,000円とさせて頂きます」とある。

永井信二氏は甲虫、とくにクワガタ、コガネムシには造詣が深く、多くの記載論文を発表しておられるし、共著ではあるが「世界のクワガタムシ大図鑑」、「世界のハナムグリ大図鑑」の著が知られている(永井信二氏が松山在住の時、ある日突然電話がかかってきてユンクの甲虫目録を貸してくれと行ってこられたことがある。全く面識もないし、存じ上げていない方にユンクの甲虫目録をコピーさせてくれといわれたのには面喰らった)。

標本は現地から送られてきたものをそのまま送っ

てこられるので、アフリカのものなどそれほどきれいな標本でない場合がある。一般的に言って普通の標本といえようか。標本案内は一年に一度ぐらいのペースであるから多く掲載されており、圧倒されてしまう。同業者、大コレクターなどは良いのかも知れないが、甲虫の標本を時々買って楽しむといった私のようなみみっちいコレクターには今一つ肌合わない。

昭南インセクト(東京)

シンガポールに6年間住んでいて、そこで昆虫館「ワールドインセクトリウム」を作った後、日本に帰ってきて標本商「昭南インセクト」を始めた大谷卓也氏の店である。

「昭南インセクト標本ニュース」No.1が発行されたのが1987年7月であり、私の手許にはNo.20(1997年5月)まで送られてきている。

蝶屋さんであった関係で標本ニュースもその大部分が蝶の標本であり(はじめの頃は東南アジア、ニューギニア方面の標本が主体であった)、私のような甲虫屋にとっては特殊なクワガタ、コガネムシ、カミキリムシがわずか掲載される程度であったので、あまり購入させてもらう機会は少なかった。

フェニックス・ワールド(東京)

フェニックス・ワールドVol.1, No.1(1988-6)が送られてきて、その標本ニュースの巻頭に「このたび6月1日より国内、国外産のカミキリ、クワガタ、コガネ等の甲虫を中心とした昆虫標本の提供、美術彫刻品等を扱う会社を設立いたしました」とある。桑久二雄氏が設立された会社である。はじめのVol.1, No.1からVol.1, No.10までが1990年8月10日までに発行され、Vol.2, No.1が1991.III, No.2(1991.VII), No.3(1991.X), Vol.2, No.5(1992.VII), No.6(1993.XII), Vol.3, No.1(1995.IV)と不定期刊行になっている。

Vol.3, No.1などは46p.にわたりギッシリと標本が羅列されていて驚くべきであるが、その後標本ニュースは送られてこない(桑久二雄氏の年賀状は1999年まで送られてきている)。

Vol.2, No.3あたりでは北ベトナムのものを多く掲載している。Vol.1, No.1にはプレート5枚に標本写真(コガネ、クワガタ、カミキリ)がギッシリと

いる。この標本写真の入ったカタログはVol.1, No.3まで続く。

このフェニックスワールドから北ベトナムで採集したハムシのセットを分けるとの連絡を1988年に受けた。早速注文したところ、そのセットの中に何とキベリハムシが入っているではないか。そこで再び電話をしてこのセットが残っていないかどうか聞くと、まだ一組あるとのこと、それも送ってもらったら今度は何と2頭のキベリハムシが入っていた。しかも2頭とも♂で交尾器を見ることができた。外観からも日本のものと違うので、日本産は新亜種になると思われるが、原産地付近の材料が十分に得られていないのでそのままになっている。この辺の経緯については「きべりはむしVol.18, No.2, p.43-44, 1990」に詳しく発表している。

1995年以後、標本ニュースは送ってもらっていないが、1995年、ルカヌスワールドVol.1, No.1, p.14-17.の中で「奄美大島採集記」を書いて、衆久二雄氏の写真も出て元気でやっている様子がうかがえる。標本商もやっておられるのだろうと思われる。

ショーバラーク(東京)

北原美男氏のやっている標本商である。いつ頃からやっておられるのかよくわからないし、送られてくる標本ニュースには番号も発行年月日も入っていない。1980年代からだと思うが、現在でも「ショーバラーク」という標本ニュースが隔月刊で几帳面に送られてくる。23p.にもなる目録で無料である。送られてくる内容があまり変わらないので、順序を変えてページだけを打ち直しているのではないのかといった内容のところが多くある。

蝶とクワガタムシが中心で、その他の甲虫が若干出てくる。どのような方かわからないが、私の友人がわりと価格の高いアフリカの大型コガネを電話で交渉して購入したが、送られてきた標本が大変状態の悪い標本だったので電話で返品するといったところ、大変な剣幕で嘔みつかれて驚いたという話を聞いた。

私は中国産のコガネムシがよく出るのでそれをもろうようにしている。標本の程度はあまり良くない(もっとも中国から来る標本が悪いのであろうと思われる)。一般的に甲虫標本があまりきれいでないのは、蝶屋さんだからかもしれない。

インセクトフリークス→バイネ(東京)

インセクトフリークスとして1988年頃から標本商を始められたのか、標本ニュースNo.1から手許にあるが、発行年月日が入っていないので困る。宮下哲夫氏がやっている店であるが、No.27に1991年11月とある。インセクトフリークスのニュースはNo.32までで、1992年バイネリストに名称が変わった(南米最南端バタゴニアのチリ側にある山群の主峰バイネグランデ3,050mに因んでいる)。

1998年12月でNo.38まで来ている。だいたい隔月程度に10ページ前後の標本リストが送られてくる。値段の高いものはどうか知らないが、現地から送られてきたままの標本を送ってくるので標本の程度は良くない。安かろう悪かろうでは困ると思うのだが今一つ魅力のない標本商である。注文書を送っても標本を送ってくるのが遅い傾向がある。納品書に標本名、価格が記入してあって現物が送られてきていないケースも多い。

ノア(松山市)

現在でもどなたが主宰しているのか私は知らない。標本案内「NOA INFORMATION」が年に何回か送られてくる。始めは大阪から送られてきたが、今は松山になっている。甲虫主体である。標本はきれいである。アフリカとか日本産、東南アジアのものでかなり神経質な標本商の印象を受ける。もうお付き合いしてだいぶ経っている。

中島 浩(浦和市)

標本ニュースとして個人名で送ってくる。1998年Jul.でNo.35である。不定期にニュースを送ってくれる。アフリカのものが多い。甲虫、蝶が主体で東南アジア、フィリピンなどのクワガタ、コガネ、カミキリなどもよく掲載されている。標本の程度はそれほどよくない。価格は個人の関係からか比較的安価である。

トロピカーナ(東京)

郡司芳明氏のやっている標本商である。かなり古くからやっている方の方である。店は東京山手線

原宿駅より徒歩1分、地下鉄千代田線明治神宮前駅より徒歩4分、タレントショップで有名な竹下通りの中程を右に入ったマンションの2階にあるとのこと。標本ニュース"COFFEE TIME"Vol.1(1991.Jan.)～Vol.26(1998.Dec.)が送られてきている。この標本ニュースはカラーによるコピー版できれいなものである。扱っているのは、蝶・蛾、甲虫、直翅類、脈翅類からクモ、サソリなど手当たり次第変わったもの、大きいもの、きれいなものを扱っている。甲虫屋にとって若干物足りない点があるが、とくに得意の地域というものもないようだ。標本はわりときれいである。1988年の年末には無事新年が迎えられそうだといいピンセット1本を記念品として送ってくれ、驚いたことがある。

最近(1999.X)鈴木雄二という人からトロピカーナで12年間お世話になり無事退職し、今回標本商らしきことを始めましたとあって「Tom Soya」というリストを送ってこられた。

四国インセクトリウム(松山)

四国の昆虫研究者としてよく知られていた山岡幸雄、菅 晃氏による新しい標本商が1997年2月に出発した。標本ニュースNo.1～No.17(1999年10月)には蝶の標本は大変少ない。甲虫主体のようである。毎回8p.で四国産のものばかりでなく、南西諸島のもの、国外産のものが出ている。甲虫はオサムシ、カミキリムシ、クワガタムシ、コガネムシが主体であるが、海外産のものもそこそこ扱っている。アフリカの甲虫類の委託販売のようなこともやっている。

標本はきれいであるが、特色の出せる販売品も見あたらない。すでにかなり標本商がある現状で新しくやっていくのはそこそこの苦勞があるように思う。

一通りのめばしい標本はだいたい日本に來ているし、未開拓の地でもあればよいが、従来販売されていた標本を扱うのであれば大きいかきれいだとか価格が安いといったことがないとやっていくことはかなり困難と思われる。四国の昆虫をというのも良いが、もう少し日本産に力を入れることが望ましい(これもだんだん規制がきつくなってくるので苦しい)。未開拓の中国大陸とか東南アジアのものを扱うということをやらねば継続が難しくなるのではと心配している。

こうして眺めてみると、標本商というものも結構たくさんあるものだと驚く(ここに記した以外にもまだまだたくさんあるだろう)。ただ、一時のように外国から標本が來たら何でも売れるといった時代ではなくなったようである。かなりの数の標本がすでに日本に入っていると思われる。もちろんまだまだ虫は多くいるので、これからも入ってくるであろうが、名前のわからないもの、小さなもの、見栄えのしないもの等々はどうしても私たちアマチュアコレクターには苦手で、お金を出してまで手に入れようという考えはおきない。研究などの必要があれば別であるが、採集データなどの正確性が甚だ疑わしいものが多いのが大きな欠点である。最近「世界のクワガタムシ大図鑑」、「世界のオサムシ大図鑑」、「世界のハナムグリ大図鑑」のような世界規模の素晴らしい原色大図鑑が出版されていて、これに出てくる標本を集めることはあまり意味がないようであるが、標本集めはやはり自分のコレクションとして違った意味で楽しみがあるのもので、そう簡単にやめることもできない。これからはこの世界も厳しくなるであろうが、虫を集めるといった行為は廢れるものではないだろう。今後、標本商とのお付き合いがどのように変化していくのか楽しみでもある。